

「命」を生きる人との出会い

「生きるために、人は生きている」この言葉の意味が、今の私は、少しだけわかった気がしています。私は去年、市内の特別養護老人ホームで介護体験をしました。入退院をくり返して亡くなった祖父を見てきた私は、介護士になることを決めたのです。それは笑顔一杯の優しさに満ちた職業。私の生きがいになるはずでした。祖父の本当の苦しみも知らず。

初日、期待いっぱいホールに入っていった私は、思わず、足を止めました。みそ汁の匂いや人息れ、生暖かい空気、何よりも驚いたのは、お年寄りたちの動かない表情でした。「笑顔、笑顔」と、所員の方に言われていたことを、自分に言い聞かせて一歩前へ。挨拶も宙に浮いてしまいました。

その後、介護のために部屋を回っていたとき、痛々しい姿を見ました。朝ホールに集まって来た方たちは、まだ健康な方でした。寝たきりになった方の体を丁寧に拭いてあげのですが、おしりにさえ、全く筋肉がなくなり、土色になった皮膚と骨だけになっていました。おしぼりでそっと拭いても、皮膚だけがよじれてしまいます。もっとひどいのが、火傷のような赤い床ずれができた方でした。所員の方が一生懸命、体の位置を変えているのですが、治りにくいのだそうです。うめき声一つあげず、がまんされている方もいました。伸びた手を、思わずぎゅっと握ってしまいました。冷たい手でしたが、握っていると温かくなってきました。

おむつの交換にも立ち合いました。私は、目をそらしてはいけない、と必死に見つめていました。これが、介護の現実でした。ショックでした。でも、気持ち良さそうに寝息を立てられると、不思議に、今までとげとげしていた気持ちが、やわらいでいきました。

もちろん、急に叫んだり、物を投げたりする方もいて、「病気で孤独なのだから」と言われても、すごく怖かったのも本当です。

食事の世話は、もっと大変でした。「ゆっくりね、ゆっくりね」と何度も言われていたのに、おもいきりむせ返らせてしまいます。のどが鳴る度、食べて、食べてと祈るような気持ちです。私が命をつないでいるようでときどきしました。とっくに冷たくなった一さじ、そのとき確かに、おじいさんは私の方を見られました。目が合いました。私は気づきました。おじいさんも、頑張って食べておられたことを。食欲は、とっくになくなっていたのに、はりきってボランティアにやって来た、孫より幼いわたしを思いやってくださったことを。さっき体を拭いてあげたおばあさんも、そうだったのかもしれない。私が応援されていた。私は、恥ずかしくなりました。

2日目が終わる頃、認知症の一人のおばあさんが、私の名前を何度も呼んで、「ありがとね」と言いながら、肩をもんでくれました。若い頃の自分のことを何度も話してくれたおばあさんです。自分のおやつのバナナを渡された私は胸が一杯でした。涙が出てきました。

介護体験の日々が終わり、私は、この体験の意味を考えました。今までの、介護の「人を助ける」という気持ちは、もう無くなっていました。私たちと同じような14歳の頃があり、自分に悩み、私よりずっと、強く生きてきた大人と出会いました。年をとって、昔のことがわからなくなっても、人としての重さが変わることは絶対にありません。生きてきた、道の長さがあります。私たちが考えているよりずっと、お年寄りは、面倒をかけることに傷ついているし、自分の状態をわかっておられるとも思いました。その上で、今を、懸命に生きている人がたくさんいます。その実感は、大きな感動となり、今の私を励ましてくれます。

お年寄りも、私たちも、同じ命の道を歩く者同士だと気づき、若い私たちが、体の一部となってそばにいること。それが、一方通行ではない、介護の第一歩だと思います。

今、私は、前とは違った意味で、自分の将来の道を歩こうとしています。